

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.101 2025 年 9 月 21 日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ: <https://www.keihinkyodougekidan.com/bunkano-nakama/>

かわさき演劇まつり 60 人の市民参加

第 41 回かわさき演劇まつりは、「チト～愛と平和とみどりのゆびと」（モーリス・ドリュオン原作『みどりのゆび』／大西弘記脚本・演出）が 7 月 26 日・27 日多摩市民館で、60 人の市民の出演参加で行われ、多くの市民が鑑賞しました。出演された方や観劇された方から感想をいただきました。

かわさき演劇まつりでの「チト～愛と平和とみどりのゆびと」の魅力

安西 学

かわさき演劇まつりで「チト～愛と平和とみどりのゆびと～」を観劇しました。この作品は、花を咲かせることのできる不思議な少年が一夜でたくさんの花を咲かせることができる不思議な力で世界を変えするという素敵な話でした。この物語の中心には「愛」と「平和」と「自然」という 3 つの大きなテーマが据えられていました。少年の純粋な視点を通じて、大人たちは日々の忙しさの中で見失いがちな価値や感情を取り戻していききました。少年の行動は、観客にもまた、自分たちの生活を見直すきっかけを与えてくれました。また、われわれは自然の力とそれがもたらす影響を再認識することができ、日常の中で忘れられがちな自然と人間の結びつきを象徴していました。

この作品のもう 1 つの魅力は、キャストがすべて一般市民で構成されている点でした。彼らはプロの俳優

ではないにもかかわらず、非常に生き生きとした演技を見せてくれました。それぞれのキャラクターが持つ個性が、舞台上で見事に表現され、観客は物語の世界に引き込まれました。

今回私は観客としてだけでなく、ボランティアとしても携わり、結果的に 4 回も観劇することができました。回を重ねるたびに、キャストが登場人物になりきって、熱が入る様子が分かり、毎回見ていてとても感動しました。特に印象的だったのは、キャストが本当にその役を生きているかのように舞台上で息づいていた姿でした。彼らの情熱と献身は、観客に強いインパクトを与えてくれました。

そして、深く感動しただけでなく、自分自身の生活を見直すきっかけを提供してくれました。愛と平和、そして自然との共生の重要性を再確認することで、日々の生活に新しい視点をもたらしてくれました。観劇後には、心が洗われたような感覚になり、感謝の気持ちでいっぱいになりました。メッセージはシンプルでありながらも深く、観客一人ひとりの心に残るものでした。演じる人々の情熱と、作品が伝えようとするメッセージが相まって、非常に感動的な時間を過ごす

写真撮影©前田修（以下同）





ことができました。

このような作品に触れることができたことに感謝し、自分もまた同じような経験を求めて新たな舞台を挑戦してみたいと思いました。かわさき演劇まつりは、地域の文化を深く感じさせる貴重なイベントでした。そして、このような機会を提供して下さったすべての方々に敬意を表したいと思いました。今後も多くの人に愛され続けることでしょう。

(なかはらミュージカル実行委員長)

チトの思いと僕の思いがさらに繋がって

片柳 あおば

川崎市は演劇部がない中学校も多く、演劇まつりを共催している市なのに、演劇に触れたり、関わる機会が少ないので、演劇のことで何となく嫌なことを言われるのではと感ずることがあります。今回はペーパーレス化でチラシを配布しないとかで、文化財団の方が学校に掛け合って下さって、僕の通う中学校では全校生徒に配布されました。日常生活ではメガネをかけているので、メガネなしの写真をみて「これ、あおば？」と学級委員に主役だということを伝えておいたくらいです。なるべく目立たないように、批判されることのないように、静かに生活をしているつもりです。



弟妹と上手くいかない。学校でも、塾でも、それは稽古場でも…。今まではつらいことがあっても「演劇があれば大丈夫！」と生きてきましたが、この数カ月は本当につらかったです。

2月に行われたワークショップでは、久しぶりに会う演劇の仲間たちのほかに、初めて会う個性あふれる演劇が好きな方もいて、「勉強との両立や両親が仕事から帰ってくるまで弟と妹の面倒をみることに」に対してかなり不安もあったのですが、一緒に演劇をやりたいと思いました。そして大西さんが演出・脚本であることも僕のなかで大きいです。

稽古初日の本読みで衝撃を受けました。みどりのゆびは過去に読んだことがありますが、かみなりさんとチトのやり取りは僕と母のようですし、みんなと違うと言われてしまうこと、それで悩んでしまうこと、戦争なんて馬鹿げているというチトと僕は考えが重なる



ところがありました。大西さんの声で聴くとまた感じ方が異なりました。振り返ってみると、稽古が進むなかでチトと自分を重ねてつらくなったり、稽古になると息苦しくなりフラフラしたり。夜は全然眠れないし稽古日以外は塾があって、23時頃から台本の読み合わせを始めるので大変でした。家では台詞が出てきても稽古場では間違えたらどうしようと言葉に詰まってしまう、演劇をすることが怖くなっていました。劣等感を力にしてと言われましたが、僕は劣等感を力に出来るタイプではなかったです。辞退も考えた7月、たくさんの人が「あおばなら大丈夫!」「出来るよ!」と声を掛けて下さり、そこからは今までの自分に戻れたような感覚がありました。

僕はニュースを見るのが日課なのですが、とにかく世界中で酷いことが起こっている。小学生の頃から、世界中の人々が平和に暮らし、戦争のような争いではなく、平和的に解決するにはどうしたら良いのだろうかとずっと考えてきました。原爆ドームや資料館に

行って学びはしてきたものの、世の中をもっとよくするためのアクションは起こしたことがなくて、主役のチトを演じることで、同じように思ってくれる人がいたらと考えていました。様々な取り組みは自分だけが頑張るものでもなくて、みんなでやっていこうよ！と学校でも発言していたのですが、台本の改稿があり「みんなでやるべきなんだ」とチトの思いと僕の思いがさらに繋がって、演じる上で偽りなく自分の思いを乗せられたし、ムスターシュとのシーンでは自然と涙が流れました。今回参加することで、色々と感じたことがあるので、それは学校の弁論の宿題にしようと思います。

(チト役 中学生)



『チト』を成功させるために頑張った

片柳 あやの

今回で2回目の参加です。9歳になりました。母から聞いた話ですが、私が2歳の時に京浜協同劇団の和田庸子さんが「きつとあやのちゃんも演劇やりたいって言うわよ〜！」と言っていたそうです。多分稽古場にヒューっとみにきていたと思います。

「私も絶対演劇をやりたい！」と思ったのは4年前の『冒険者たち』ですが、その時あおばは忠太の役をしていて、今の私と同じ9歳でした。だから今年の『チト』はその時のあおばに負けたくないという気持ちがありました。

あおばと、かいとくんがチトの役になりました。私もオーディションを受けたので、ちょっと悔しかったけど、2人ともすごいので、自分の役を頑張ろうと思いました。私はよく頭が痛くなったり、めまいがして学校を休むことも多いので、具合が良くなってきたら台本を読むようにしていました。音読の宿題は好きじゃないけど、台本を読むのは面白いです。前回の『モ



モ』の時はなかなかセリフが覚えられなかったので、自分で考えて読むようにしていました。ちょっとテキレジが大変でした。稽古でどうやって動いたらいいのか分からない時、優しい大人の人たちが教えてくれたり、一緒に練習してくれました。足がとても痛くてとてもつらかったけどスキップを頑張りました。

学校でチラシが配られないので、担任の先生が特別に配っていいよと言ってくれました。チトTシャツを着て学校へ行って宣伝したり、6年生の兄も町内のお祭りにチトTシャツを着てお店番をやって宣伝をしてくれていました。本番で転んで、両足にあざが出来てとても痛かったり、フラフラしたり立っていて足が痛くてもがまんしました。私も『チト』を成功させるために頑張ったけれど、出演する人だけじゃなくて、まわりの人もたくさん協力をしてくれました。だから頑張りました。あと、こっそり？学校の先生たちも観に来てくれて嬉しかったです。

これからもぼくは演劇をがんばります

鈴木 凱登

この演劇で初めて「みどりのゆび」を知りました。ストーリーにたいして思ったことは、チトは、自分の





ゆびを使って困った人を助けるのでやさしい子だなと思いました。

オーディションの時は馬のジムナスティックという役をやりたいと思っていました。理由は、チトの親友だしチトを支えてあげるキャラクターが好きだったからです。役を発表されるとき、ぼくはドキドキしながらけいこ場に行きました。そうしたらぼくはチト役でした。思っていた役とは違ったので少し残念だったけれど主役のチトになれたことはうれしかったしとてもびっくりしました。

ぼくはけいこに行くのは好きでした。今まで会ったことのない人と仲良くなってえんぎの話をしたり、皆と話しながら帰ったりすることが楽しかったからです。

ぼくにとってチトは、「やさしい」「人のことを思う気持ちが強い」「ムスターシュが大好き」なので、役作りではチトになるためにこれらを心がけました。でもやっぱりチトになりきるといことはむずかしかったです。最後の長ぜりふは覚えるのが大変だったけれど、何とか覚えることでできてうれしかったです。

ぼくはかみなりさんとのシーン(3場)が好きです。理由は、初めてチトが困った人たちのために自分のみ



どりのゆびを使うからです。気を付けたことはとくはないけれど、演出の大西さんにはこのシーンが得意だねと言われたのでよかったです。

けいこ場は、ぼくよりも年上の人が多かったので、とてもかわいがられてうれしかったです。本番の日は、みんなでがんばろうと言ってはげましあって、きんちょうをふきとばしました。そしてとてもいい本番にすることができました。

この演劇でえたけいけんを他の演劇にも生かしていきたいです。これからもぼくは演劇をがんばります。

(チト役 10歳)

彼を取り巻く人たちが導いてくれた

草間 湖奈美

主人公のチトは優しく勇敢な少年だ。その役を息子・鈴木凱登が引き受けることになり、厳しくも楽しい生



活が始まるなと思った。今思うと、元来、生き物が好きで人の^{いさか}諍いに加わらず人にも生き物にも優しいと担任にも言われる息子は、チトと重なる部分は初めから多かったように思う。そして人の心の機微に敏感で内面の深い子だったので、自分の持つ感性の中で演じることが出来るだろうとも思っていた。実際に早い段階からチトの片鱗を見せた時は、そのまま行こう!と心の中で激励した。

凱登がチトと歩んだ4カ月間、彼は演技の中で生まれるいろいろな物事に対しチトのように「なぜ? どうして?」と疑問を感じ、それらを1つひとつ解決しながら稽古に励んだ。彼はチトとともに成長していき、出演者の方々と苦悩と喜びを共有し、それらを乗り越えてあの2時間弱ある本番の舞台で自らの成長を披露した。大人でも大変なことを彼は10歳という年齢で

やり遂げたのだった。チトは「みどりのゆび」を持っている。作品の中ではそれは不思議な力であったが、争いを好まず生き物が好きな凱登の中にあるやさしさや他者を思いやる心は間違いなくチトの心であり、それこそが「みどりのゆび」だろう。凱登はチトという少年の姿を借りて私たちの中にも「みどりのゆび」があることを、体を張って教えてくれたのだと思っている。

チトと手を取り合い、ともに平和を願った彼が最後までやり切ることができたのは、彼を取り巻く人たちが優しく寄り添いやさしさの手本となり導いてくれたからにほかならない。(鈴木凱登の母)

若い人たちに消えかかった灯を委ねて燃え盛る灯りにしてほしい

大西 弘記

かわさき演劇まつりの千秋楽が終わって1カ月が経ち、僕は自分の劇団(TOKYO ハンバーグ)と新劇の劇団銅鑼さんとの合同企画『月から抜け出したくて』の本番中(今現在8/29)である。『チト』の稽古期間中に今現在上演している作品を書き上げ『チト』の稽古も佳境に迫る7月にこちらの稽古も開始。上板橋と鹿島田を行き来し、同時進行で進めながら『チト』の千秋楽の翌日からこちらの終日稽古が始まった。

毎日が演劇の日々、故にかわさき演劇まつりが終わった感覚は、もう半年も前のことなんじゃないかというくらいの錯覚に陥っている。

4カ月間という稽古期間中は、様々なドラマがあったのを覚えている。一生懸命に取り組む人、それでもなかなかうまく出来ずに悔しがる姿、それをやっとな克服できた喜びと自信、一方では稽古に来ない人、モチベーションが低下して出演を辞退する人、台詞をなかなか入れてきてくれない人、居眠りをする人、稽古の休憩ではなく稽古中に何かを食べだす人、と、良くも悪くもすべてが面白かった。

50年以上も歴史があるかわさき演劇まつりは川崎の文化芸術の灯を守ってきたのだと思う。文化芸術は人を人間へと育て、街をコミュニティにする。ならばそこに存在する人を大切にしなければいけない。人の生活、人の権利、人の命、それらを大切に初めて豊かな暮らしになるのだと思っている。

昨今、どこも経済的に厳しく、今回のかわさき演劇まつりは文化庁の助成金を受けることも出来なかった



ので大きな赤字になったと聞いた。あれだけ精一杯に沢山のひとと演劇を育んだのにもかかわらず、とても残念で仕方がない。こういう現実直面すると、やはり現代社会において演劇という芸術は淘汰される一方なのだと哀しいかな、感じてしまう。

少しネガティブな作物になってしまうので逆の話を書く。例えば、予算に困ることなく舞台美術にしても膨大なお金をかけることが出来たとしよう。果たして今回僕たちが創作した『チト』を越えられたであろうか？ たらればの話だけれど僕は“NO”だと思う。なぜならば、お金がないのならないで工夫をするからだ。劇中に出現する大きな地球儀、大きな2つの大砲、それから少年チトが咲かせる無数の花たちも。

そうした知識、知恵、知能、知性が働き、今回のかわさき演劇まつりは上演されたのである。

しかし、経済面で言えば、もしかしたら灯は消えかかっているのかもしれない。僕は演劇を始めて27年目であり、もう若手ではない。今回はなんとか灯を守る一端を担えたと思うが、これからのかわさき演劇まつりは僕よりも若い人たちに消えかかった灯を委ねて、昔の様に燃え盛る灯りにしてほしいと切に願う。



安達元彦さんを偲ぶつどいによせて

安達さんの音は、ボクなりにボクの中でずっと鳴ってます

栗木 健

ボクが安達元彦さんと最初にお会いしたのは、京浜協同劇団が1998年に上演した『コーカサスの白墨の輪』の時でした。

思えば一介の打楽器奏者のボクが芝居の音楽に携わるきっかけとなる公演でした。その稽古の時に演劇の音楽を作っていく過程を初めて間近で見たのですが、色々興味深く学ぶことが多かったと思います。

安達さんが役者に何度も「上手く歌おうと思わなくていい、もっと自由に！」と指導してたのが印象的でした。

ボクの得意な事^{すく}を掬い上げてくれて、アレンジにも上手く取り入れていただきました。

正直、その時はまだ安達さんのことはあまり存じてなかったのですが、その後何度もご一緒させていただくうちにアカデミックな音楽の世界で活躍されてたことや、フォークソングや劇伴などそれまでと真逆のジャンルに方向転換された話しなどを聞いて驚きました。

先日の安達元彦さんを偲ぶ会で安達さんの初期の現代音楽の曲を生演奏で初めて聴いたのですが、音がピアノの中で弾け周りながら飛び出してくる感じがして感動しました、ホント凄い！

そしてそんな曲を作ってたと思ったら笠木透さんたちとフォークソングのドサ周りの演奏したり、合唱団の演奏したり、驚愕の幅広さですね。

以前、京浜協同劇団のとある作品で安達さんの音楽のお手伝いした時は、パソコンで音を加工したらこんなことが出来ます、と僕が試しに作ったサンプルを聴かせたところそれを気に入っていただき、録音したピ

アノの音を容赦なくグチャグチャにして使っていました。笑

新しいテクノロジーやジャンルも分け隔てなく取り入れていけるのは、安達さんの中にしっかり安達さんの音楽が鳴ってるからなんですよ、そういうの憧れるなあ…。

あ、そういえば以前安達さんがピアノを弾きながら凄く長いオナラをしたことがあります。

凄く驚いたけど、安達さんはまったくシレッとしてました。

もしや何か伝えようとしてたのかもしれませんが、…ボクには察することが出来ませんでした。



『コーカサスの白墨の輪』の時、歌とギターで参加されてた塩田儀夫さんに安達さんが「ギターの弦は毎ステージごとに張り替えた方が良いよ」と指示したために、ボクたちが休憩してる時に普通あまり張り替えない弦を塩田さんだけ毎回一生懸命張り替える羽目になった事件も可笑しい思い出です。笑

安達さんと鈴木たか子さんとボクとで、九州から京都まで演奏のツアーをしたこともありました。

京浜協同劇団の『黒と白のピエタ』の再演では、光栄にも安達さんの代打で音楽を担当させていただきました。

本当にたくさん貴重で楽しい体験をさせていただきました。

安達さんの音は、ボクなりにボクの中でずっと鳴ってますよ～(^ ^)

ありがとうございました。



写真撮影©長坂クニヒロ

第 27 回文化の仲間定期総会

劇団員との情報の共有を課題に

文化の仲間・事務局長 山木 健介

2025 年 9 月 7 日（日）に第 27 回定期総会をスペース京浜（京浜協同劇団稽古場）で開催しました。

総会の参加者は 15 名、総会記念企画の杉本孝司さんの講演は 19 名の参加でした。

2025 年 3 月 2 日に、5 年ぶりに第 14 回お楽しみ会を開催しました。

劇団の「この日この地でこの人々と」にならって地域の人たちに劇団に来てもらうために始めたお楽しみ会ですが、コロナの関係で 4 年間開催できなかったことと今まで 1 月のお正月に開催していたのを 3 月年度末開催にしたせいか？

来てくれた子どもは 4 人だけでした。子どもの父母や地域の大人および劇団員スタッフ出演者含めて 35 人の参加でした。小学生の時にお楽しみ会に来たことがあるという高校生が参加してくれたのが今回やって良かった最大の出来事でした。

2025 年 8 月 15 日に予定していた花火納涼会ですが、東京都大田区が花火大会を 8 月 28 日に延期したので、今年の花火納涼会は中止しました。

東京都大田区が昭和 59（1984）年 8 月 15 日に大田区平和都市宣言を行ったのを記念して毎年 8 月 15 日に平和記念式典と平和祈念花火を行っていたので、それに便乗して劇団の屋上で花火納涼会を開催してきました。

1 か月前の 7 月 15 日に大田区は「十分な警備人員の確保や混雑時の安全確保」ができないとして花火大会を 8 月 28 日にすると発表しました。8 月 15 日の花火はなくなり、8 月 28 日では私たちの体制が取れないので、花火納涼会は中止しました。去年は劇団の前のマンションの住人が 2 人参加してくれて、来年も来ますと言っていたので中止は残念でした。

総会で、花火のチラシを見ていない劇団員がいるこ



とがわかりました。文化の仲間の会員には郵送していますし、劇団周辺のチラシ全戸配布をしていますが、劇団員には劇団の机にチラシを置いているのと壁にチラシを貼っているのですが、個別に情報伝達する必要があることがわかりました。

今後劇団員に情報が伝わるように改善していきます。

総会の最後に、役員を選任しました。役職変更で二村さんが代表を退任しました。

役員（敬称略）は以下のとおりです。

世話人 高橋明義、橋本教善（以上代表）、山木健介、須田セツ子、西川日女子（以上事務局）、川島雅博、二村柊子

会計監査 渡辺そのこ

総会のあとに、総会記念企画として東京芸術座の杉本孝司さんの「演劇はいつも人生の大事なことを教えてくれた」という題でお話をいただきました。

杉本さんは、東京芸術座の話から金芝河（キムジハ）の「金冠のイエス」の話、そして京浜協同劇団との出会いの話をされました。京浜協同劇団の 4 人が訪ねてきた。煙突男を和田庸子さんが書いたのを読んでみた。家族の話を中心にしたらいけるんじゃないか。芝居は根っこが楽しくないと。チームづくりができないと芝居にならない。役者が本気になるのか。

ピエタの話。安達元彦さんの力も大きかった。芝居は楽しくないとダメ。結果は考えないで逃げないでやる。ふんばってくれた人がたくさんいた。チームづくりとやりがい。芸術とは何か。なぜ芸術が必要か。ばらばらな人を 1 つにしてくれるのは芸術。

人間は必ず死ぬんだが、いつ死ぬかわからない。生きる勇氣、力になるような芝居をつくりたい。少しでも残る芝居と一緒につくっていききたい。

（杉本さんの話の要旨は山木の聞き取りメモによります。）

講演のあと、多くの方の参加で交流会を行いました。



5年ぶりに「お楽しみ会」を開催しました

山木 健介

2025年3月2日（日）に5年ぶりに第14回お楽しみ会を開催しました。

コロナ禍で、密を避けるために開催をやめていましたが、2020年1月12日以来の開催となりました。

準備の都合などで3月開催になりましたが、護柔一さんに作っていただいたチラシを新聞折り込みと地域配布をやって開催しましたが、参加者は子ども4人、高校生以上の大人16人、出演者・文化の仲間・劇団員15人の35人の参加でした。

子どもが今まででいちばん少ない結果になり、宣伝不足か3月開催に問題があったか5年ぶりのせい、次回開催に宿題が残りました。



しかし、高校生が3人参加してくれて、「子どものときに来たことがある」と言っていました。2003年から開催している「お楽しみ会」の継続は力ですね。

地域の人が劇団に気楽に来てもらうようにするために始めたお楽しみ会。子どもを呼べば親や祖父母も一



緒に来てくれるだろうという発想から始めました。

今回の出演者は大道芸の松鶴家天太さん、腹話術の鈴木裕子さん、バナナのたたき売りの川島雅博さん、朗読の瀬谷やほこさん、紙芝居の護柔一さんで、司会は、しろたにまもるさんとゴローちゃんでした。最後に参加者全員で輪投げ大会を行いました。

次回第15回は、2026年1月11日（日）を予定しています。



花火納涼会は中止しました

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間

2025年8月15日（金）に予定していた花火納涼会は中止しました。

東京都大田区では、平和都市宣言を記念して毎年8月15日に「平和記念式典」と「平和祈念花火」を開催していました。それに便乗して劇団の屋上で花火納涼会を開催してきました。

大田区はホームページで、「今年は平和記念式典と平和祈念花火の日程を分けて開催します」と発表し、平和記念式典を8月15日（金）、平和祈念花火を8月28日（木）と発表しました。

理由として、十分な警備人員の確保と混乱時の安全確保がかねてより課題でした。別日での開催を検討した結果、花火を8月28日の開催とすることに決定いたしましたとしています。

8月15日は花火が開催されないことになり、8月28日では私たちの体制が取れないので、残念ですが今年の花火納涼会は中止いたしました。

「ふかい疵——たったひとつの青春」 新たな一步

作り手も観客も共感し合える舞台を

京浜協同劇団 渡辺 そのこ

今年の秋公演を「ふかい疵^{きず}」に決めた。劇団初代代表、黒沢参吉の作品だ。1952年に作品が発表された。その7年後に、川崎協同劇団（現在の京浜協同劇団）が結成される。「ふかい疵」は、とてもシンプルな作品だ。だが「反戦」という強いメッセージが根底にある。2002年に京浜協同劇団で上演された時のパンフレットに、黒沢参吉の夫人である黒川シズエさんの文章が掲載されている。その一部を抜粋させて頂くと「黒沢がこの芝居を書くことになったきっかけは、かれの持ち前のロマンチズムと、自らの戦争の辛い体験からだと思います。日中戦争、太平洋戦争の二度の招集。その銃撃戦で中国人を撃ったことへの罪の意識が、彼の戦争を憎む源泉になったのです。軍隊生活の中で人を愛する立場になって、その中で苦しみ悩んだことを書きとめておきたかったからだと思います。」

今も戦争や紛争が続いている。今年、戦後80年。この間、日本は平和な日常を送れたことの意味を理解し合い、作品に込めて伝えたい。

昨年、劇団は65周年を迎え、多くの人の熱い思いで「黒と白のピエタ」を成功することができた。

杉本演出により、芝居を創っていくということ、役に向き合うということを粘り強く指導して頂き、久々に「掘り起こす作業」を経験した。

この「掘り起こす作業」は、「黒と白のピエタ」の作者、和田庸子氏が何をみて、これから、どういう作品を描きたかったか。この劇団でやりたかったか。それを探る（和田庸子氏の思いを手繰り寄せる）この思いが、根底にあったはずだ。昨年の公演を終えて、それぞれの劇団員が何を感じ、何を得たのか。それがあって、一步踏み出せるのだと思う。

そんな中、久しぶりに新しい仲間が、4人も劇団に入ってくれた。素直にうれしい。「この日、この地で、この人々と」この言葉の通り先輩たちは、自分たちの職場や地域の仲間と関わり合って活動してきた。自分たちを取り巻く事柄に常にアンテナを張り発信してきた。観客も今現在置かれている状況が、芝居の中の役に重なり共感を生んだこともあったに違いない。

市民劇や演劇まつりも、劇団の活動の1つとして継続してきたからこそ、新人を迎えることが出来たのだろう。

スタッフも新人をまじえて、新しい体制でスタートする。演出は柳沢芳信。私は、初めて制作担当になる。新しい仲間が加わったことで、観客層も広がり上演する作品も変わっていくだろう。作り手も観客も共感し合える舞台を目指し、「ふかい疵」に挑みたい。

京浜協同劇団 第99回公演

ふかい疵

戦後80年におくる、反戦への願いを謳った名作

作 黒沢参吉 演出 柳沢芳信

日 程 11月22日（土）～30日（日）

会 場 スペース京浜

主 催 京浜協同劇団

〒212-0052 川崎市幸区古市場2-109 TEL 044-511-4951 FAX 044-533-6694

Eメール: keihinkyoudougekidan@nifty.com

	22 (土)	23 (日)	24 (月・祝)	29 (土)	30 (日)
(開演)					
11時	○	○	○	○	○
15時	○	○	休演	○	○

◎文化の仲間通信◎

◆川崎市岡本太郎美術館

戦後 80 年《明日の神話》次世代につなぐ 原爆×芸術展
日程 7月19日(土)～10月19日(日)
9:30～17:00(入館16:30まで)
会場 川崎市岡本太郎美術館
休館日 月曜日(10月13日を除く)、10月15日(水)
料金 一般 1,000 円 高・大学生・65 歳以上 800 円
※中学生以下は無料

広島市立基町高等学校・創造表現コースの高校生たちが描いた「次世代と描く原爆の絵」(広島平和記念資料館蔵)原画も 42 点紹介。

問合せ TEL 044-900-9898 FAX 044-900-9966

◆神奈川県立金沢文庫 金沢八景みほとけ巡礼

仏像から読み解く金沢の歴史
日程 9月5日(金)～11月9日(日)
休館日 月曜日(10月13日、11月3日は開館)、10月14日、11月4日
会場 神奈川県立金沢文庫
料金 一般 600 円ほか 詳細は公式サイトへ
中世金沢に展開した寺院の実態や、その後の金沢八景を中心とした巡礼寺院としての位置づけなどを明らかにする。

問合せ TEL 045-701-9069

公式サイト <https://www.pen-kanagawa.ed.jp/knaza-wabunko/index.html>

◆東京国立博物館

特別展 「運慶 祈りの空間―興福寺北円堂」
日程 9月9日(火)～11月30日(日)
9時30分～17時00分(入館は閉館の30分前まで)
会場 東京国立博物館 本館 特別 5 室
料金 一般 1,700 円(一般前売 1,500 円) 大学生 900 円(大学生前売 700 円) 高校生 600 円(高校生前売 400 円)
鎌倉時代を代表する仏師運慶の仏像が安置される空間をそのまま伝える貴重な例である北円堂は通常非公開ですが、修理完成を記念して弥勒如来坐像の約 60 年ぶりの寺外公開が決定。

問合せ 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

公式サイト <https://tsumugu.yomiuri.co.jp/unkei2025/>

◆日本民芸館 棟方志功展Ⅲ 神仏のかたち

日程 9月21日(日)～11月5日(水)
10:00～17:00(最終入館は16:30まで)



絵手紙 竹間テル子

毎週月曜日休館(祝日の場合開館し翌日休館)
開催日カレンダー

<https://mingeikan.or.jp/information/calendar/>

柳宗悦らの教示により宗教への理解を深め、特に仏教を主題とした作品を次々と発表。棟方の真骨頂とも言える、神仏の造形。

料金 一般 1,500 円 大学生 800 円

問合せ TEL 03-3467-4527 FAX 03-3467-4537

◆演劇集団土くれ 第 71 回公演「煙が目にしみる」

日程 2025 年 10 月 2 日(木)～4 日(土)
会場 麻布区民センター 区民ホール
原案 鈴置洋孝/作 堤泰之/演出 石塚幹雄/出演 佐々木政晴・奥山規子・小沼武司・村田佳代・小林朝子・安原昇ほか

料金 一般 2,000 円 中学生以下 1,000 円

※全席自由席

桜舞い散る頃、地方のとある斎場。たまたま同じ日に火葬となった二組の家族。にぎやかな野々村家と、参列するものも少ない北見家。それぞれに最愛の父との最後の別れを惜しんでいた。そこに白装束を着た二人の男が。

問合せ 劇団 HP: <https://tsuchikure.net/>

◆劇団埼玉 第 106 回 創立 60 周年記念公演

「山の背の空」

日程 10月3日(金)～5日(日) 13時半会場/14時開演
会場 三井金属あげおコミュニティセンター ホール
作・演出 平石耕一/出演 朝比奈悦子・伊藤節子・金子明・河合文子・後藤瑠奈・庄瑞恵ほか

料金 一般 3,500 円/65 歳以上 3,000 円/小中高生 1,500 円

秩父事件を題材とし、愛する人や暮らしを守るため政府に声を上げた男たちと、日常を支え続けた女たちの生活を描き、蜂起に至るまでの人間のエネルギーを読み解いたフィクション作品。

詳細 劇団 HP: <https://gekidan-saigei.jimdofree.com>

◆東京芸術座 2026 年 1 月公演

「心を歩ませて」(仮) シアター X カイ提携公演

作・演出 大西弘記(TOKYO ハンバーグ)

鋭意制作中

◆劇団銅鑼公演 No.63

『HOPE ～本を焼き尽くす悪魔～(仮)』

日程 2026 年 2 月 25 日(水)～3 月 8 日(日)

会場 銅鑼アトリエ

作/斎藤栄作 演出/金澤菜乃英

詳細は今後公表

問合せ 劇団銅鑼 TEL03-3937-1101(平日 10 時～18 時) FAX03-3937-1103

E-mail: info@gekidandora.com

●文化の仲間からお知らせ

訃報 本会報に「私のうたごえ人生」をご執筆いただいていた菅野章さんが、2023 年 12 月の交通事故で意識不明のまま療養中とのお知らせをしていましたが、本年 6 月 10 日に逝去されました。87 歳でした。葬儀は家族葬で営まれました。心よりご冥福をお祈りいたします。